

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## 吉森義紀さんの思い出

著者	村田 邦夫
雑誌名	神戸外大論叢
巻	59
号	7
ページ	1-2
発行年	2008-10-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00000802/">http://id.nii.ac.jp/1085/00000802/</a>



# 吉森義紀さんの思い出

村 田 邦 夫

吉森さんが退職してかなり月日が過ぎてしまった。正確には、半年あまりなのだが。それにもかかわらず、私の頭の中では2、3年は経っているように思えるのだ。その間、外大の研究班の会合で3回は顔を合わせている。それなのにだ。もっとも、そう思うのも仕方のないことだ。外大に籍を置いて以来、吉森さんとは、必ずといって良いほど、毎週1回は、口角泡を飛ばしながら、政治について、政治学研究について語り合ってきたからだ。15、6年である。私のような傲慢で、不遜な人間とよく辛抱しながら付き合ってきたのだから、この人はやはりエライと尊敬してしまう。

「ラテンアメリカ」の政治に関して、優に35年以上にもわたり研究し続けている。当然のことながら、そこから学ぶことは大である。だが、その間、自分の神経を摩滅させ、意気消沈させながら、研究対象と向き合い続けなければならない。吉森さんの性格を考えると、そうなることは必至であるし、事実そうであったのである。そうした事情というか理由からだろうが、吉森さんはいつも「政治学研究者は政治から離れてしまう」とか「政治なるものには距離をもって、関わらない方が良い、関われない」といつてきたのだと、私はみている。こうした点でも吉森さんとは共通していた。教授会での吉森さんの発言は、自分の生き方が反映されていて、私には面白いものであったが、おそらく多くの方には理解されないものであったと思える。それは仕方がないものである。最初から理解されるとは本人も考えていないし、吉森さ

んの話はいつも自身の生き方、生き様と結びついた発言であったからだ。

政治学者だけでなく、およそ社会科学、人文科学の研究者である限り悩ましいことは、自身の書くものと、発言や生き方のずれ、乖離に気付いたときの身の処し方、振り方ではないか。ソクラテスは終生、公職につくことを頑なに拒否した。そのわけとして、いくら命があっても自分の言動に責任を背負いきれるものではないといった趣旨のことをソクラテスが述べていたことを思うたびに、自分を恥じる日々が続くのだが、吉森さんは、この点においても、非常に厳しく、禁欲的態度を示し続けている。そのように私はみている。学生の前で話をするとき、どれほど自分が「嘘」をついてきたか、今もついているか、思わないときはない。苦しいものだが、吉森さんはそのたびごとにいろいろな体験を語ってくれ、もっと悩め、苦しみ続けろと、叱咤激励してくれたものだ。例によって、吉森さん一流のはにかむような仕草で、「よせよおー」などと。吉森さんは、その意味では、言行一致の生き方だったといえるだろう。（吉森さん、ごめんなさい。少しホメスギました。私自身をソクラテスと比較したりして。）

これまで吉森さんについて、ごくごくその限られた話をしてきたが、もうこのあたりで止めておこう。吉森さん本人があまり持ち上げられるようなことは嫌いだし。ただ私は決してそのようなことをしたつもりはない。

吉森さんについては、もっと語らねばならないし、そうしなかったらかえって失礼だと思っている。研究者として、学者としての評価についても当然ながら述べなければと思う。私もそれは重々承知している。しかしこれに関しても、吉森さんの人となりを見れば、ここで述べることでもあるまい。しかしやはりこれだけは触れておきたい、多くの人に伝えておきたい大切なことがある。おそらく吉森さんと何度かご一緒すればお分かりになることだろう。それはおよそ先生とか、教授というイメージにほど遠いところで生きて来られたという、まさにそうした生き方だと思うのだが、私はそれが一番、吉森さんのエライところだと確信しているのだ。その意味ではやはり「真正正銘」の先生であったと。